

3.2 松本市街地周辺の土砂災害年表と災害分布図

表 3.1 は、松本市街地周辺の土砂災害一覧表です。

表 3.1 (1/2) 土砂災害年表

 本冊子で取り上げた事例

位置	和暦	西暦	災害概要	出典
⑨	文禄四年	1595 年	浅間温泉の横谷沢、塔の入沢の洪水で、大音寺の神明社などが流出した。	※5
①②	寛永十二年 八月十日	1635 年 9 月 21 日	薄川洪水、小松より切れ込む。埋橋および川南町浸水、床上 3 尺 (90cm)。	※1
③⑧	寛文四年 八月	1664 年 9 月	女鳥羽川の大洪水で浅間橋下で東に切れ、水汲村の金井堰が破壊された。大村西部一帯は大洪水で多くの土石流入した。大村では屋敷を西方の畑地に移動させ、旧屋敷地は開田した。	※5
①	元禄二年 五月	1689 年 6 月	薄川大洪水、小松下で堤防決壊する。	※1
⑨	元禄十一年 五月二十日	1698 年 6 月 27 日	浅間温泉の横谷沢の洪水山津波で、上浅間の南部 12 軒が流出した。この時女鳥羽川が洪水となり、田畑が多く流出した。	※5
⑨	正徳五年 六月十七日	1715 年 7 月 17 日	女鳥羽川・薄川・田川が大洪水で、田畑が流出した。博労町などで浸水した。	※1 ※5
⑤	享保六年閏 七月十六日	1721 年 9 月 7 日	薄川は林村（里山辺）で切れ、北川原へ押し出した。	※2
①	享保十三年 八月三日	1728 年 9 月 6 日	薄川小松下で切れ、蛇川・中川と合流源地へ押し出し、南町全部浸水、女鳥羽川は御堀と合水し、海の如くなる。	※1
①⑥	享保十五年 五月	1730 年 6 月	薄川、女鳥羽川氾濫、城下町の大半浸水する。	※1
①② ⑦	享保十六年 五月	1731 年 6 月	薄川は小松下で、長沢川は埋橋下で、女鳥羽川は岡宮上で、田川は出川で決壊する。全町浸水、大手橋を除き諸橋残らず流失する。この時田畑の流出と土砂の流入で復旧に苦しむ。	※1 ※5
①②	元文三年 五月七日	1738 年 6 月 23 日	降雨続き、諸川出水、薄川小松で切れ、埋橋・博労町浸水する。	※1
⑧⑨	寛保二年 八月一日 「戌の満水」	1742 年 8 月 30 日	大雨が降り続き、女鳥羽川が水汲下で切れ込み、安原・横田・和泉町を襲う。薄川が氾濫し、宮村・小池町を浸す。女鳥羽川上流の浅間村（浅間温泉）でも横谷沢で崩壊して土石流が発生し、激甚な被害を受けた。被災民の 35 軒が湯久間（下浅間）に集団移転した。	※1 ※5
⑧	延享四年 八月十九日	1747 年 9 月 23 日	大風雨、女鳥羽川水汲下で切れ込み、安原・和泉・東町本瀬となる。	※1
①②	明和二年 四月十六日	1765 年 6 月 4 日	女鳥羽川洪水、薄川小松で切れ、埋橋浸水する。	※1
①	安永七年 八月二十五日	1778 年 10 月 15 日	薄川小松天王下宮下で切れ、松本浸水、2 尺 (60cm) となる。	※1
①	安永八年 七月	1779 年 8 月	女鳥羽川洪水、薄川小松で切れ、縄手・六九・宮村・小池・飯田・東町浸水する。	※1
①⑧	寛政元年 六月十八日	1789 年 7 月 10 日	薄川小松下で切れ、川南浸水、高札場橋流失する。女鳥羽川水汲で切れ川北浸水、奈良井川洪水渚村で流れ、熊倉 10 軒流出した。	※2
①	寛政十年 四月八日	1798 年 5 月 23 日	降雨続き、薄川は小松で決壊、伊勢町本瀬となる。	※2
—	文化元年 八月	1804 年 9 月	連日大風雨奈良井川洪水、笹賀で川欠けとなる。	※2
①	文化四年 六月十二日	1807 年 7 月 17 日	薄川小松で切れ、松本町床上浸水 62 戸、女鳥羽川切れ、餌差町・裏町横町流水、家屋流れる。	※2
②	文政二年 五月十四日	1819 年 7 月 5 日	薄川埋橋で切れ、博労町被害を受ける。	※2
⑪⑫	天保十三年 五月十七日	1842 年 6 月 25 日	薄川・女鳥羽川決壊し、城下一円浸水、大手橋を除き橋落ちる。浅間温泉の宮の沢が洪水となり、横手及び沢添の田畑が土砂を蒙り、災害となった。	※2 ※5
①⑧ ⑮	嘉永三年 五月十七日	1850 年 6 月 26 日	薄川は小松で、女鳥羽川は水汲、安養寺裏で切れ、埋橋・四谷・清水・源池・下横田・餌差・鍛冶町被害を受ける。梓川小宮で切れ浸水する。奈良井川満水、小俣村で川欠となる。	※2
⑦	安政二年 七月二十九日	1855 年 9 月 10 日	田川洪水、女鳥羽川岡宮東で切れ、川北東部浸水する。	※2

3章 梓川流域（女鳥羽川・薄川）の土砂災害

表 3.1 (2/2) 土砂災害年表

本冊子で取り上げた事例

位置	和暦	西暦	災害概要	出典
⑦	安政六年 七月二十五日	1859 年 8 月 23 日	大雨で諸川満水となり、沿岸各村で被害を出す。女鳥羽川岡宮東で切れる。	※2
①② ⑧	安政七年 五月十五日 (万延元年)	1860 年 7 月 3 日	大風雨、薄川南小松・埋橋で切れ、女鳥羽川水汲・安楽寺裏で切れ、城下一円大浸水となる。	※2
①⑧	慶応元年 閏五月 十七日	1865 年 7 月 9 日	連日の大雨で女鳥羽川は水汲で切れ、松本本町東辺に流入した。薄川・田川も切れる。田溝地・中の池・矢作地決潰、安原・西町・徒土町・北馬場・鷹匠町床上浸水する。	※2 ※5
①④ ⑬	慶応四年 六月八日 (明治元年)	1868 年 7 月 27 日	大雨で諸川満水、薄川小松にて 150 間 (270m) 切れ、水勢 3 方向（埋橋御塚・清水・本町筋方向）に溢れる。女鳥羽川も清水辺りより南岸へ溢れ出て、中町・本町・伊勢町本瀬となる。	※3
①⑨	明治 15 年 10 月 1 日	1882 年 10 月 1 日	薄川小松下と博労町東にて北へ切り込み、川南一円浸水、中町と本町の辻が深き堀となる。この時信州一帯南北とも洪水被害となった。	※3
⑧⑨ ⑩⑭	明治 29 年 7 月 21 日	1896 年 7 月 21 日	明治 29 年の水害は松本開基以来の大災である。女鳥羽川が水汲辺の数ヶ所で決壊し、安原・裏町・和泉町・餌差町、続いて東町・出居番を襲い、片端の堀に押入った。堀と道路一面の海となった。浅間温泉でも大規模な土石流・洪水が発生した。薄川は筑摩神社付近で左右両岸で決壊した。左岸側は筑摩神社付近を襲い、西方の田圃を伝って新家町を襲った。	※3 ※5
⑦⑩	明治 38 年 6 月 21 日	1905 年 6 月 21 日	女鳥羽川堤防岡宮東にて決壊し、裏町・鍛冶町・餌差町・東町より出居番を流れ、下馬出しにて女鳥羽川に合流した。薄川は最近築造の石堤と消防組の力で、決壊を防ぎ留めた。	※3
—	明治 39 年 7 月 16 日	1906 年 7 月 16 日	田川・薄川・女鳥羽川洪水氾濫し、橋梁堤防を決壊した。此時消防組がその防御に尽力し、賞を受けた。	※3
⑯	明治 44 年 8 月 4 日	1911 年 8 月 4 日	女鳥羽川堤防破壊し、北深志町東部浸水、薄川同じく決壊し、南深志町東南部浸水、流家 2 棟、浸水 720 戸、堤防破壊 133 間 (239m) の被害となった。	※3
⑰	昭和 20 年 10 月 10 日	1945 年 10 月 10 日	前日からの集中豪雨で女鳥羽川増水し、元町橋近くの堤防が 72m 決壊して、近くの小学校などが床下浸水した。国は 22 年 10 月 20 日に災害救助法を制定した。	※4
—	昭和 24 年 6 月 22 日	1949 年 6 月 22 日	デラ台風が襲来し、豪雨で奈良井川・鎖川・牛伏川が氾濫して、島内・寿で田畑に被害があった。	※4
⑱	昭和 24 年 8 月 31 日	1949 年 8 月 31 日	キティ台風が全国を襲い、死者・行方不明者 50 人以上の大きな被害となった。松本市でも女鳥羽川が曙町で決壊し、和泉町・東町・下横田町などで、住宅 2119 戸が浸水し、田畑の被害は 8.7ha にも及んだ。松本市に初めて災害救助法が発動された。	※4
⑲	昭和 34 年 8 月 14 日	1959 年 8 月 14 日	台風 7 号が長野県下を通過し、戦後最大の洪水をもたらした。女鳥羽川が増水して老朽化した念来寺橋が流され、すぐ下の鍛冶橋に引っかかり、激流を塞ぎ止めて氾濫させた。商家や民家 4000 戸の床上・床下浸水、市街地は泥海と化した。26 日には岸信介首相などが災害現場の視察に訪れ、災害救助法が適用された。	※4
—	昭和 34 年 9 月 26 日	1959 年 9 月 26 日	台風 15 号（伊勢湾台風）が襲来したため、台風 7 号の被災箇所を重点的に警戒した。氾濫の主な原因は上流からの土砂の異常な堆積であった。	※4
⑳	昭和 56 年 6～8 月	1981 年 6～8 月	6～8 月には集中豪雨が相次ぎ、7 月 18 日から翌朝にかけての豪雨で大門沢が氾濫して、床上浸水 10 戸、床下浸水 100 戸をかぞえ、公共下水道にも被害がでた。	※4

※1 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会（1975）：東筑摩郡松本市・塩尻市誌，第四巻，年表・索引，687p.

※2 松本市（1995）：松本市史，第二巻，歴史編Ⅱ，近世，944p.

※3 松本市（1973）：松本市史，下巻，1030p.

※4 松本市（1997）：松本市史，第二巻，歴史編Ⅳ，現代，986p.

※5 本郷村誌（1983）：本郷村誌，1329p.

図 3.5 は、松本市街地周辺の地理院地図（表 3.1 の地点を追記）で、現地形・土地利用、各河川の河道位置を示しています。松本城は、女鳥羽川・薄川・田川に囲まれた低地部に建設されたことが分かります。

諸国大名は領土を拡大して労働力を確保し、土木技術を駆使できるようにしました。新たに政治・経済の上の必要性から、城を要害堅固な山岳地から丘陵地に建設するようになりました。

松本城の東側と南側を中心として、城下町を建設し、家臣団や商工業者を城下に住まわせました。城

の立地は水辺空間との関わりに対して以下の事項が重要視して選定されました（吉田・新谷, 1998）。

○軍事的要害の地

○河流等による水運

○都市の衛生保持

○生活用水としての利用

○農・工・商業などの経済的機能

城の構成は本丸を中心に東・南・西に二の丸を配置し、外側に三の丸が取り巻く縄張りでした。

表 3.1 は、松本市街地周辺の土砂災害一覧表で、図 3.5 に主な災害発生地点を記号で示しました。

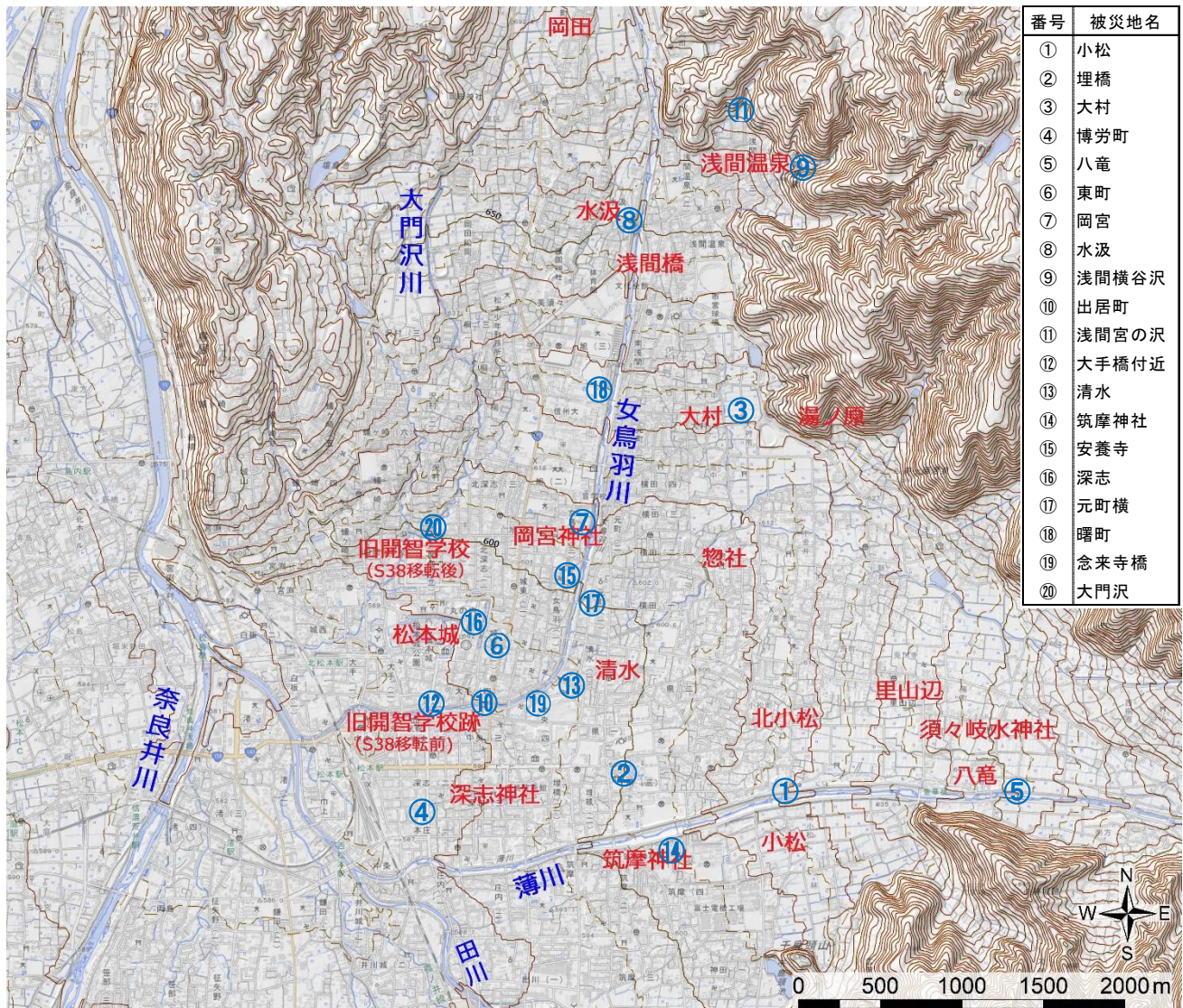


図 3.5 松本市街地周辺の地理院地図（現地形・土地利用）に地名・河川名、表 3.1 の土砂洪水災害一覧図の発生位置図を追記（地理院地図「標準地図」「陰影起伏図」、国土地理院基盤地図情報をもとに編集）